

スピーカーアキュライザーの導入(11)

ー接続方法の変更ー

1. 始めに

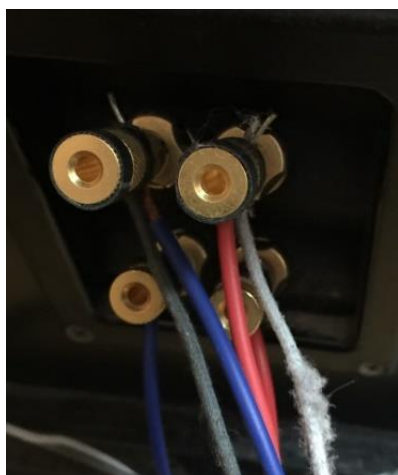
前報(10)に引き続き、スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴を実施します。

2. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、ケーブルの接続方法を替えてみます。

オーディオ仲間邸での試聴のA氏邸訪問記(2023.3.22)において、SPA-7への接続はバナナプラグにより実施しました。今回、オーディオ仲間からバナナプラグをいただきましたので、スピーカーケーブルラインの接続をネジ止めからバナナプラグの接続に変更してみます。

まず、スピーカー入力端子ですが、手持ちのバナナプラグで、既にLow側には使用していますので、High側にも同様に使用しました。



SPA-7では入力側をバナナプラグに交換しました。出力側は現在使用しているバイワイヤリングの分岐用のバナナプラグは差し込みできませんでした。また、いただいたものはバイワイヤリングの2本の線が入りませんので、今までどおりバイワイヤリングの分岐用プラグを使用し、分岐前の1本線をいただいたものに使用してSPA-7の出力端子に差し込みました。



3. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴結果

スピーカーケーブルの入出力端子のねじ止めからバナナプラグに交換することでの音質変化は期待できないと思いながらも念のためチェックしておくことにします。手始めに STAGE+ からリサ・パティアシュベリ他のシューベルトの「鱒」を再生したところ、全体的に顕著な変化はありませんでしたが、冒頭のコントラバスのピチカート、その後の低音の下支えや4楽章のメロディラインなどが明瞭に浮き出てくるのが分り、予想しなかった結果になりました。

そこで通奏低音など、低域への影響が考えられるアナログ盤を聴いてみることにしました。

トレヴァー・ピノック指揮イングリッシュコンサートによるバッハのチェンバロ協奏曲では、通奏低音のみならず、低音全体が明瞭になり、ともすれば高域が勝ちがちなこの曲がどっしりと落ち着いた演奏に聴こえるようになっています。

ゲオルグ・ショルティ指揮ウイーンフィルによるワーグナーのワルキューレの冒頭部分では、コントラバスの合奏の切れと明晰さが向上し、ティンパニの一撃なども迫力があります。

オットー・クレンペラー指揮フィルハーモニアのヘンデルのメサイアでは、オーケストラの通奏低音にオルガンも加わっていますが、それらが一体となってオーケストラや合唱を下支えしており、安定感をもたらしています。

さらに STAGE+ からアンドリス・ネルソンス指揮ゲヴァントハウスによる本拠地での昨年暮れのベートーヴェンの第9の演奏で4楽章を聴いてみましたが、コントラバスの合奏がだぶつかず、綺麗に分離して聴き取れました。

4. まとめ

スピーカーケーブルの入出力端子のねじ止めからバナナプラグに交換し、バロックアンサンブルの通奏低音やコントラバス、オルガンのペダル領域などの低音域の音質変化を認めました。

以上